文学は何の役に立つのか？

影山 敬之

動物では、遺伝子にプログラムされた本能によって、親から子へすべてが伝わりますが、人間は本能だけでは親から子へすべてを伝達できません。人間では、本能自体が壊れているのです。それによって、欲求を超えて、**欲望**という特殊なものが生まれました。この欲望を介して、人間は世代から世代へ文化というものを伝達して生き延びています。伝達というのは、大人が子供を教育することであり、子供が大人を模倣するということです。新しい世代が、前の世代の模倣をするということです。

欲望を介して、本能によって伝達できない部分が文化という形で伝達されます。ここで私が話している欲望は、たとえば、大人の欲望を子供が模倣するということなので、他の人の欲望を真似るということになります。獲得形質は遺伝しません。親が習ったことは、親から子へは伝わらないので、子供はいちからすべて習わないといけないわけです。たとえば、子供は言葉を学ばないと話すことができません。自分で覚えるほかないわけです。本能にかわって機能しているのは、「他者の欲望」なので、「文化にとっての遺伝子は他者の欲望」と私は考えています。

「他者の欲望」というのは、自分があの人のようになりたいと感じるときの欲望のことです。その人に会ったり、その人の話を誰かから聞いたりすると、その人がもっているモノ・生き方・技能・趣味・交友関係・社会的地位などを自分も手に入れたいという欲望をだくということです。その人の欲望を取り入れ、自分のものとして同化していくという過程をたどります。真似をしたくて真似をしていきます。

ああいう大人になりたいと子供が思ってくれないと、大人から子供に文化が伝わりません。漁労、狩猟、農業でも、鍛冶、土器作り、機織りでもなんでも、あの人と同じようになりたいという欲望がないと、伝統は途絶えます。そうなると、共同体自体が維持できません。

ルネ・ジラールの「欲望の三角形」の概念の図式を借りて、私の考えを述べます。(＊図1)この「欲望の三角形」は**媒介**を頂点とした二等辺三角形をなすとジラールは言っています。底辺の二角が**主体**と**対象**とされています。私が考察するのは、世代から世代へと他者の欲望を媒介にして伝達される文化です。ジラールの二等辺三角形の構図は、私の観点からは、応用できない側面があるので、少し解釈しなおした構図にして使わせてもらいます。たとえば、ジラールの欲望の三角形の構図では、キリスト教徒が**主体**に相当し、キリストはキリスト教徒の**媒体**です。**対象**は、キリストの信仰、考え方、行為などです。ジラールの『ロマン主義の嘘と小説の真実』から引用します。

> ドン・キホーテは、アマディースのために、個人の基本的な特権を放棄した。彼はもう、自分の欲望の対象を選ばない。アマディースがかわってそれを選ぶのだ。ドン・キホーテは、すべての騎士道の模範者が自分に示したか、あるいは仄めかした対象に向かって、突き進むだけだ。 我々は、このような模範者を欲望の媒介者と呼ぶことにする。キリスト教徒のあり方が、キリストの模倣だという意味で、騎士道的あり方は、アマディースの模倣なのだ。

ドン・キホーテはセルバンテスの小説『ドン・キホーテ』の主人公で、妄想的な騎士です。彼は、騎士道物語をたくさん読みすぎて、そのうちの一冊、『アマディース・デ・ガウラ』という本に出てくる騎士・アマディースに惚れ込み、彼のようにふるまおうとします。ドン・キホーテ自身は騎士ではなく、騎士になり

たい人です。ドン・キホーテには老いた馬と素朴な田舎者の従者のサンチョ・パンサがいます。ルネ・ジラールの解釈では、アマディースはドン・キホーテの**媒体**であり、ドン・キホーテはサンチョ・パンサの**媒体**です。媒体は、モデルということです。アマディースがサンチョ・パンサの媒体となることはありません。ここでは、欲望の三角形の構図は、独立した二つの三角形をなしています。この場合、世代から世代へと文化が伝達される関係を描くことができません。そこで、ジラールの欲望の三角形を連続する形に変更した構図が必要になります。ジラールへの批判ではありません。彼の分析の範囲に、私の問いが入っていないようなので、変更して使わせてもらうということです。

頂点に**対象**、底辺の二点に**主体**と**媒体**をおく三角形の複合体を作ります。(＊図2) これによって、世代から世代へと文化が伝達される構図ができあがります。主体、媒体、対象は流動的になり、一人の人間の三側面となります。

簡単な物語を例にして説明したいと思います。

昔々ある村に、偉大な漁師がいたという伝説がありました。それを村の漁師たちが語り継いできました。それを聞いた子供たちは、その伝説の漁師のようになりたいと思いました。それで、漁師になる村人の数は絶えることがありませんでした。隣の村にも、その影響は甚大でした。

ジラールの「欲望の三角形」を私が少し変更した構図を応用すると、この伝説の漁師の話では、子供が**主体**に相当し、伝説のすごい漁師を語る、若い漁師や年配の漁師が**媒体**になります。**対象**は、伝説の漁師です。 ジラールの欲望の三角形の構図では、キリストがキリスト教徒にとっての**媒介者**ですので、その考えを当てはめると、伝説的な漁師は村の漁師にとっての**媒介者**となります。キリスト教徒の場合、キリストの信仰・行為・考えが**対象**です。

この伝説の漁師の話で重要なのは、あの漁師がどれだけ偉大であるかを語ることです。彼はとてつもなく大きな魚を獲ったとか、マグロの一般釣りに秀でていたとか、 あの漁師がいたから、村では飢えなかったとか、突然の大嵐にも生還して帰ってきたとか、 溺れていた人を救ったとか、そういう物語を子供たちに聞かせ、そういう人になりたいと思わせることです。

あの人のようになりたいと思っている大人の漁師の欲望を真似る欲望を子供たちがもつようになることが、村の生存に関わってきます。生きる糧を魚に依存しているので、子供も漁師になってもらわないと困るのです。他者の欲望を真似させる媒介が、うまく機能するためには、伝説の漁師を語る人の表現力が必須です。伝達するだけでなく、 魅了する話術が求められます。これが**文学**に通じます。

人間は、欲求だけでなく欲望という動物にはないものをもちました。この欲望を遺伝子のようにコピーの基盤として使っています。「文化にとっての遺伝子は他者の欲望」というのは、このことです。